



## 教授の呟き

### 第76回

# 新入社員の、夢はかなうか？

東京海洋大学 理事・副学長

苦瀬博仁

#### ●●● 教え子の就職

3月に社会へ送り出した卒業生は、4月に新入社員となっている。そのなかで1人の教え子の行く末を、いささか心配している。本人の資質に、問題はない。心配の種は、実は会社の体質なのである。

今からちょうど1年ほど前に、就職活動中の彼が相談にきた。

「なぜ出世の見込みのないロジスティクス部門を志望するのか」と、第1志望の会社の採用担当者に質問されたことを気にしていた。しかし信念の固い彼は、「どうしてもこの会社でロジスティクスをやりたい」と答えたのだという。

工学系大学院の修士課程にいた彼ではあるが、その会社はロジスティクス部門を文系社員の職場と決めているらしい。そのため初任給は学部卒と同じであり、最初の数年間は営業部門に配属の予定だそうである。

一方で、理系で入った研究職の修士修了の学生の給与は、学部卒より高いらしい。

ロジスティクスに力を入れている先進企業を多く知っているだけに、彼の選択は間違いかもしれないと心配になった。

#### ●●● ロジスティクスに必要な ●●● 工学的センス

ロジスティクスについては、日本が「現地調達」とか「1億火の玉」などと言っていた第2次世界大戦中

に、すでにアメリカではOR（オペレーションズ・リサーチ）を中心に工学的解析手法が開発され、いまではロジスティクスの分野でも取り入れられている。

しかし現在の日本の企業で、最新の工学的手法を丹念に取り入れようとする意気込みは、あまり感じられない。むしろ、古い理論と管理手法がいまだに主流を占めている例は多い。なぜなら、そこにはスペシャリストもいなければ、理工系の社員も少ないからだろう。加えてロジスティクス担当者が、工学的な手法に理解を示そうとしない傾向もありそうだ。

だから「数理的な分析よりも、現場経験だ」などと、なりがちなのだろう。これでは「兵站（へいたん：ロジスティクス）を確保せずに、食料は現地調達」とした半世紀以上前の発想と同じように見えてしまう。

#### ●●● 昔から変わらないことか？

半藤一利と江坂彰の対談による「日本人は、なぜ同じ失敗を繰り返すのか—撤退戦の研究—」という本では、太平洋戦争を題材に、いまも続いている日本人の弱点として「失敗の本質」が書かれている。

「旧日本軍の戦略思想には、情報と兵站の重要性が、信じられないほど稀薄だった」「情報参謀とか兵站参謀は、『そこにいればいい』といった程度の認識のされ方だった」としている。

「日本は、スペシャリストという存在を認めず、スペシャリストとすべき参謀をゼネラリストへの階段とした」「優秀な人間はゼネラリストになり、ゼネラリストになれない人間がスペシャリストになるという『とんでもない錯覚』をしてしまった」とも指摘している。

### ●●● 日本軍と日本企業の共通点

教え子が就職した会社は、日本人ならば知らない人がいないくらいの優良大企業である。それほどの会社の人事担当者が、まさかロジスティクスを軽視するとは思わなかった。

文系の人間をゼネラリストとして育て、理系は研究職だけでよいとする発想は、あまりにも硬直的であり時代錯誤でもある。ロジスティクスを専門に勉強して工学系大学院を修了した学生を、スペシャリストとして育てようとする意識がないことは、悲しい。

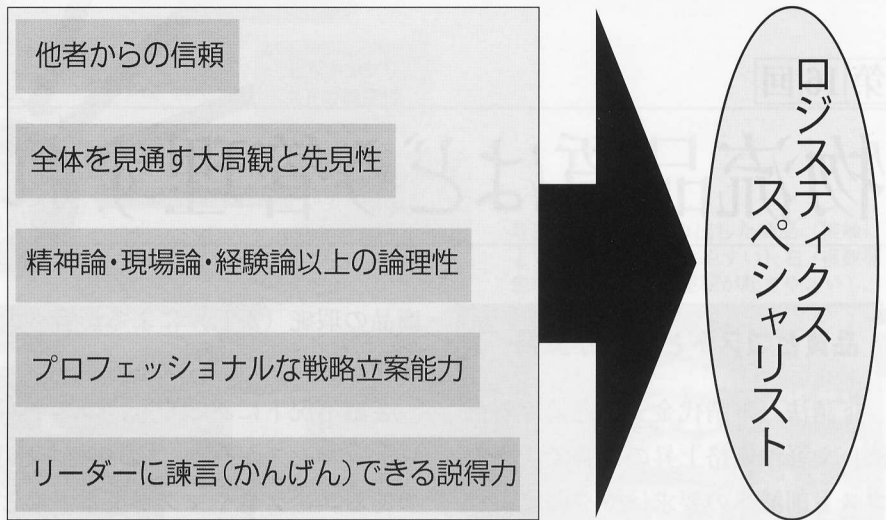
この会社の「ロジスティクス軽視」と「スペシャリスト軽視」は、排除すべき「日本の悪しき伝統」そのものに思える。日本には戦略的思考が不足し、ロジスティクスが弱点と指摘されているが、これを克服できない会社もあるということを知った。

少数の社員だけの誤解であってほしいと、心から願っている。

### ●●● 教え子の行く末

さて、新入社員となった教え子

## ロジスティクス・スペシャリストへの期待



は、将来どのような道を歩むのだろうか？

とりあえず営業の最前線を回ることになるのだろう。もちろん賢い彼は、「将来のために現場経験が大切」と自覚している。他の新入社員とそん色なく仕事をこなしていこうから、営業部門に引き留められることもあるだろう。

そんななかで、彼はいつまで「ロジスティクスをやりたい」という気

持ちを持ち続けられるだろうか。気持ちが萎えない間に、そして6年間学んだロジスティクスの知識が古ぼけない間に、是非ともロジスティクスのスペシャリストとしての道を、歩み始めて欲しいものである。☑

- (1) 半藤一利・江坂彰「日本人は、なぜ同じ失敗を繰り返すのかー撤退戦の研究ー」(p3～5、p79、p145)、知恵の森文庫、光文社、2006年
- (2) 苦瀬博仁：「ロジスティクス受難の時代か?」、教授の呟き第52回、流通設計21、第38巻4号、pp60-61、2007年

**Profile**

東京海洋大学 理事・副学長  
**苦瀬博仁**

(くせ ひろひと) 1951年東京生まれ。73年早稲田大学理工学部土木工学科卒業。81年、同大学大学院博士課程修了後、日本国土開発に入社。86年東京商船大学助教授、94年より同大学教授。2003年大学統合により東京海洋大学、副学部長、評議員、流通情報工学科長を経て現職。94年から95年の1年間、フィリピン大学客員教授。04年6月より東京大学大学院医学系研究科客員教授(併任)。主な著書に「付加価値創造のロジスティクス」(税務経理協会)、「都市交通ー都市交通計画・都市物流計画」(丸善)、「マニラ・エンジョイ・トラブル」(論創社)、「明日の都市交通政策」(成文堂)、「都市の物流マネジメント」(勁草書房)、「病院のロジスティクス」(白桃書房) <http://www2.kaiyodai.ac.jp/~kuse/>

